

授業改革を核とする学校改革：
新玉民中学校への軌跡

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-05-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 牧田, 秀昭 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/5431

授業改革を核とする学校改革

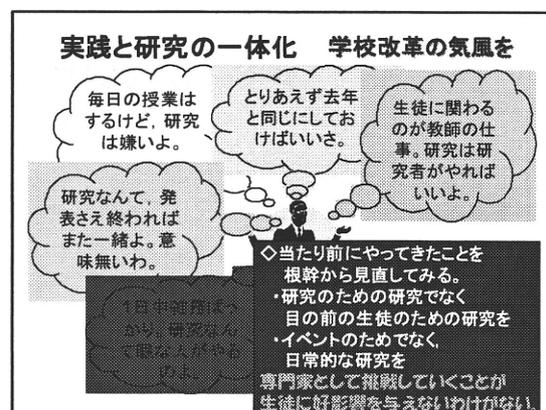
—新至民中学校への軌跡—

牧 田 秀 昭

至民中学校へ異動する前年まで、福井大学教育地域科学部附属中学校で研究主任をすると同時に、福井大学大学院「学校改革実践コース」に籍を置き、長期実践を省察する機会に恵まれた。10年程度の長期にわたる授業実践、及び学校改革の省察の過程で自分自身の意識改革が進められたことを自覚している。『中学校を創る』も出版できた。そんな自分が附属中学校を出て、文字通り新しい学校を創る機会に巡り会った。これは典型的な普通の公立中学校が「異学年型教科センター方式」として移転開校することを契機に変貌を遂げていった記録である。

1 はじめに —学校改革＝教師の意識改革—

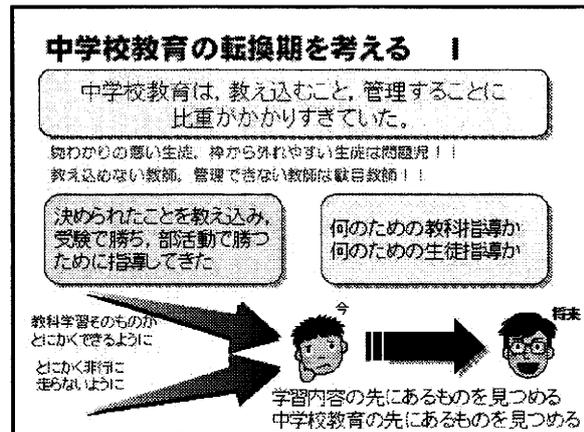
教師は自己変革が難しい職業である。理由は幾つかある。大学を卒業したばかりの教師も、経験の多い大先輩と肩を並べて学級担任や教科担任として教壇に立つ。自分の数年前の体験を想起し、目の前の生徒に当てはめていくしかない。しかし生徒にしてみれば管理職以外は皆同じ教員で、むしろ年齢が近いが故に言葉がスムーズに入り込む。ゆえにさしたる知識も経験もないのに自分は一人前だと錯覚する。中堅教員も同様である。教室はたいてい閉ざされた空間で、他者の目が入るわけでもなく、他者の取り組みを注意深く眺めることもない、独立王国が築かれやすい。毎日の実務はハードであり、じっくりと自分の実践を振り返る間もなく、次の瞬間には次の業務が待っている。大きな問題がなければ次年度も同じことを繰り返すのもうなずける。



もちろん、このマンネリを打開するためにいろいろな方策が講じられている。研究授業の義務化であったり、講師を招いた講習会や授業研究会、各種研修、研究指定校の設定等、様々である。しかし毎日の実務に奔走している当の教師は、研究と実践は別物と考えている。「研究は研究者に任せておけばよい」「不都合がないんだから去年と同じにしておけばよい」「研究発表なんてその時だけで、終わってしまえば元に戻るんだから、やる意味がない」という具合である。

至民中学校は、学校改革を進めていく中で、同時にこのような教師の意識改革を進めてきたように思う。平成17年度からの3年間で共通理解してきたことは、「研究のための研究でなく、目の前の生徒のための研究実践を」「イベントでなく日常的な研究実践を」「簡単に前例踏襲せずに、当たり前やってきたことを根幹から見直して」という3点に集約される。毎日繰り返される教育実践が本当にこの生徒たちにとってベストなのか、この問い無しに教育改革など存在しない。そのためには年に数回のイベント的なものに力を入れるのではなく、地味でよいから、小さくてよいから、全ての教員が日々の実践・経験・それらのバックグラウンドを省察し、明日へのヴィジョンを構築することこそ、学校改革の一步につながると信じている。

教育界の大きな転換期に来ているとよく言われる。中学校教育に関しても同様である。このことに関して、「中学校教育は教え込むこと、管理することに比重がかかりすぎていたのではないか」という提案を繰り返してきた(2007.12.4 福井市中学校教育研究協議会；後述)。高校入試のために、決められたことを教え込み、教科学習をとにかくマスターさせることを最優先してきた。



これは勝利至上主義の部活動の指導に似ている。目の前の高校受験や中体連の試合に勝利を得ることはもちろん大切であり、保護者の期待も大きい。しかしそれだけでよいというのは早計であろう。受験が終われば勉強は終わり、叱られなければ影で悪いことをするのは何のための中学校教育だろうか。我々は今現在の生徒の姿の向こうに、将来の姿を見据える必要があるだろう。何のための教科指導なのか、何のための生徒指導なのか、といった教師自身の問い直し、そして教育観の転換が不可欠であろう。新至民中学校への開校準備の中で強調してきた事柄である。

「学校改革は教師の意識改革」に尽きる。難しいことだが「分かりやすく」と誰からも同意を得られない。このバランスを常に考えていた。

2 学校に「学び」の灯をともし（平成17年度）

至民中学校の学校改革は、平成17年度より始まったと言える。「異学年型教科センター方式」としての移転開校まであと3年と迫り、学校の研究の中心を「教科の授業」に置いて、全校体制で学校改革を始めた年度である。

「部活動や生徒指導などの指導は大事だし、これまでもずっとやってきた。研究をやるほど時間のゆとりはないし、しっかりと知識をたたき込んで受験に備えることが一番。」というムードが支配する中、まず取り組んだのは授業改革である。「研究」というと身構えるが、「授業実践」という言葉にそっぽをむく教員はいない。しかし、一般的に授業研究は指導主事訪問や研究指定など、外向けに行われているものがほとんどであるという現状がある。それを打開するため、「授業研究は自分自身のため」「授業公開は外部でなく内部に」「授業者でなく参観者が意義を見出す」ことを提案した。授業研究を、格式張った形式的なものから、気軽な日常的なものにしようとしたのである。

至民式の授業公開と参観記録—何のための授業公開か—

前任校の福大附属中は先進的な研究を義務づけられている学校である。授業研究はその中で中核をなし、部会毎に授業公開をし、実践記録にまとめていく文化が、「学校文化」として息づいている。研究集会や紀要を作成する実践研究の年間サイクルも出来上がっている。しかし、外部からは「附属だから」という眼で見られることが多く、一般公立校への波及はなかなか進まない現状がある。反発すら感じられる現状をどう打開するか。附属中研究主任当時、研究会で同僚の先生方に「附属中の教員は附属中を出てからが本当の勝負」と言い続けてきた経緯もある。その点至民中は公立中、しかも生徒指導困難校、学力底辺校として名高い(?)。だからこそ、ここでの学校改革は意味がある。幸いなことに、力のある教員が多い。目指すところは附属中学校のような「数年先」を提案していこうというポリシーであり、「今」の生徒の学びを丹念に見取っていく研究スタイルであることは同様である。しかし「特別な」場所から異動してきた私は「附属や大学のまわし者」「公立中の敵」と見られかねない。附属と同じことなどしてはならず、「附属では」は絶対に禁句である。「学び」の灯をともしするためには至民独自の方法を考案する必要がある。研究主任ではなかったが、学年主任をする傍ら、たまたま研究部の「授業づくり部会」の責任者となり、授業づくりについてはどんどん進めて行けばよい立ち場を得たので、地道な(傍目にはそうは見えなかったかもしれない)取組を始めた。

まずは授業公開である。指導主事訪問以外にも授業公開がなわれていたようであるが、例えば総合的な学習の部会が指導案を練り上げて研究授業を行うという形式であった。そこで、指導案はいらないから、授業を外部でなく内部にどんどん公開し、どの教科でも良いので手の空いている教員が参観しよう、というシステムを始めた。「授業公開」というと、研究授業に見られるように、必要以上に意識して「よそ行き」になってしまいがちである。それでは学校の日常は変わらない。普段の授業でよいことを強調した(普段の授業

で良いと言っても、やはり公開となればいろいろ工夫するものである)。事前の授業研究会で指導案検討を繰り返し行い、場合によっては誰の指導案なのか分からなくなってしまうこともこれまで実際に見てきた。また、指導案が協働で作られ、綿密なものであればあるほど、授業者は指導案から離れられられなくなってしまう。指導の流れを分刻みに立てておいてその通りに進めていくという授業でなく、目標・中心課題・指導過程の構想はしっかりと立て、あとは生徒の状況に合わせて教師も随時考えながら授業を進めていくようにした。授業の主役は生徒であるべきである。

授業公開をハードルの高いものに行っている要因は、授業研究会の在り方にもある。事後の検討を充実させたいが、授業公開が増えてくると検討会の時間を確保することも難しくなってくる。福大附属中は「部会」の時間が時間割の中に設定されているが、一般公立中は持ち時数が多く、そういうわけにはいかない。また放課後も部活動の指導で、手が空くのは7時頃であり、それから授業研究会をするのでは身が持たない。反発も目に見えている。それで、「参観記録」を職員の共有フォルダ内に記述することを提案した。記録の書き方としては、授業全体の感想とか印象、全く別の理論を振りかざした代案を書くことはやめ、それに代わって、生徒の実名を挙げて、観察した事実を記録することにした。これで、参観者の視線が教師から生徒へと徐々に変わっていった。呟きや応答の様子、ノートなどの事実から、個々の生徒の学びの筋を読み解くのである。指導案もないので、自ずと授業のねらいを探ろうとし、実際の生徒の学びとのずれを明らかにし、原因を探る。授業者の葛藤場面を見抜き、それに対する意見もあったら書いてもらうようにした。「授業者に寄り添う」とはこれを意味し、「公開して良かった」と授業者が感じられるものにしようと共通理解した。こうやって書き綴られた記録は全員の目に触れ、どの教師はどのような参観記録を書いたかを把握できるため、他の教員の記録を見て、授業の見方を理解していくことも可能になった。

秋田喜代美氏(東京大学大学院教授)はこの取組について「共有フォルダに残しておくのも良いけれど、直接のコミュニケーションが持てない?」と感想を述べていたが、それはまだ次の段階だという印象を持っていた。それほど授業研究については旧態依然としたものであった。また、後に別の効果もあることがわかった。それは文字情報として残ることである。書き手は言葉を選び、読み手も言葉の裏の意味を探ろうとする。秋田喜代美氏の言う「ドキュメンテーション」のショートスパン至民版といったところだろうか。

手始めに、私が教科書レベルの普通の課題をグループ毎に解決し、教師に説明に来る、という形式の授業を公開した。参観の先生方は、特段変わった課題でもないので気楽にグループ内の話し合いの様子を観察することになった。しかし一言一言聞いていると個々の生徒の躓きも見えてくるし、自分の授業の時と違う反応をしている生徒も発見し、「気軽に公開し気軽に参観記録を書く」ことは難しいことではないことが実感できたようである。「普通の授業でいいよ。」という声が、本校に赴任してきた教諭に、誰からともなく毎年

かけられるようになる。

授業研究会の在り方の転換－誰のための授業研究会か－

年に数回行われる全員参加の授業研究会の在り方も、参観記録と同様、システムを変更した。一般的な授業研究会は、授業者の反省で始まり、授業者への質問、それに応じる形で会が進み、終盤で同じ教科の教員からのコメント（ここでもう他教科の意見は聞かれなくなる）、最後は指導助言を聞く、という流れであろう。授業者だけが「まな板の鯉」となるこの会の犠牲者（あえてこの用語を使う）は若手か異動して来たばかりの教員と相場は決まっている。

まず、お決まりのような授業者の反省はやめ、参観者が参観した事実を出し合い、授業の意義を参観者同士で構築していくようにした。ここでも全体的な感想や印象でなく、固有名を出し合って、「あの子にとってこの授業はどんな意味があったか」を語り合うようにしたのである。授業者への質問も極力控え、傍観者や評論家でなく、参加者全員が意義を語り合う会にした。協議の最後には、授業者が、授業と授業研究会で学んだことをまとめて話して、会を閉める（特に、授業者が最後に発言権を得ることは多くの賛同を得られた）。外部から指導者を招いて外部にアピールする授業研究会ではなく、日常的な内部による内部のための研究会である。他教科の授業を参観し、授業研究会に参加することで、「学び」に関して、教科の壁を越えた語りが少しずつ出来るようになってきた。

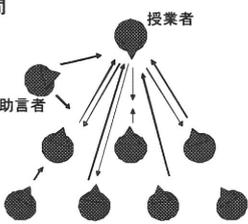
校内研究会に招いた松木健一氏（福井大学大学院教授）からは、「固有名詞で語られることが最大の生徒理解。授業で生徒を理解することはそのまま生徒指導に繋がる。これからの授業参観は視覚だけでなく、聴覚や五感をフルに発動して行われていることを感じる事が重要」と、個々の生徒を見ることの意義を明らかにして頂いた。秋田喜代美氏からも、「生徒を知っている教員で授業を見る事が大事。生徒を知っているからこそ教師の悩みを共有できる。実践記録も同じ。生徒がぬけたら単なる授業名人になってしまう。」と言われている。このような教科を越えた授業研究会に大いなる意義を感じながらも、2年後には教科センター方式になってしまうことから、むしろ教科会の結束を重視していくべきではないかという迷いもあったが、松木健一氏に、「センター方式となって皆バラバラの場所にいることになるのだから、尚更教科を越えた研究が重要じゃないか」と言われ、その通り、学校全体の方向性を見失わないためにも教科を越えた研究会の重要性を再認識した。これは、現在移転して教科会は日常的に行われる状態にあり、一層感じていることである。

ところで、他教科の参観はなかなか大変である。一体何を考えているのか、何に躓いているのか、それこそボーッと見ていても分からない。つぶやきを拾い、ノートの書き込みを見て、生徒の顔をうかがい、生徒の頭の中を想像する。友達の話に首をひねっていた事実が、随分後のつぶやきやノートの記述へとつながっていることを発見したときは大変うれしいものである。また、自分が発見できなかった事実を他の参観者から聞くのも大変勉強になる。視線が生徒へと移っていくのを実感できる瞬間である。

授業研究会の在り方の転換

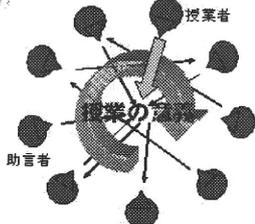
これまでの一般的な授業研究会の流れ

- 1 授業者の反省
- 2 参観者の授業者への質問
- 3 授業者の応答
- 4 他の参観者の意見
- 5 同じ教科からのコメント
- 6 授業者の思い
- 7 参観者の感想
- 8 指導助言



本校の授業研究会の流れ

- 1 参観者が参観した事実を伝えあう。
(全体の感想でなく、固有名で出し合う)
- 2 参観者がみんなで授業の意義を明らかにする。
(生徒の学びを再生する)
- 3 最後に授業者が
授業を創った思いや
研究会に参加しての
感想を述べる。



至民中の実践記録－教員の名刺代わり－

これまでも毎年研究紀要を発行していた。しかし、部会毎のまとめや教科毎のまとめを代表者だけが書いていたり、研究授業の指導案がそのまま載っていたり、といったもので、必ずしも作成後に改めて読み直す、という性格のものではなかった。ここでも福大附属中のような研究紀要を提案するには壁が高い。変更点を2つ提案した。代表者だけでなく、教師全員が授業の実践記録を書くこと、1時間の授業記録ではなく、「問題解決型学習のひとまとまり」を書くことにしたことである。分量は3枚以内で、とにかく書く。「どこかに例はないか？」と聞かれたが、どこかのまねをするのではなく自分たち独自の紀要にしたいのであえて例示はしない。案ではなく実際に行われたことを、授業研究会同様に、一般論ではなく具体的に固有名を挙げて、表形式や箇条書きでなく文章形式で、時系列に授業者が捉え直して書き綴った。また、締め切りを1月末日とし、2月中に各研究部会や教科会で読み合わせることにした。読み合わせでは、教科を超えて場面場面での授業者の思いを聞き出し、授業のねらい、培いたい力等を明確にしていき、再度修正して紀要原稿とした。こうして始めた実践記録は、1年目はやはり表形式や羅列が目立った。また私の実践記録を読み、「なぜこれだけ生徒の発言を覚えているのか、ビデオでも撮ったのか」「生徒が何を考えていたのかなぜわかるのか」といった質問を小グループでの読み合わせの時に受けた。私の1年目の実践は未発表ではあったが内容的にインパクトがあるもので、なおかつ3時間程度の軽い実践であった。誰でもこれくらいは出来るし書けるというものにしたのである。この私の記録を検討する中で、ビデオを起こすのではなくあくまで授業者の記憶による、インパクトのある発言はメモしておく、感想や気づいたことなどをノー

トに書き留めさせて後でノートを見る、といったことを紹介する。生徒の内面が分かるようなワークシートを準備しておくこともいい、と他の教師も発言し、私は大変感動した。この教師は2年後の全体研究会でも、全体研究会の場で「紀要が授業を変える」ことを発言している。

表形式から文章形式になると何が変わるのか。まず、接続詞を用いることでつながりを意識するようになることである。次に、理由や背景を語るようになる。読み合わせでは筋が通らないような箇所が質問され、それに答える形で自分自身の意図が明確になっていく。「なぜそう感じたの?」「なぜその発問をしたの?」「その時の生徒の反応は?」といった問い直しへの答えが綴られていく。次の変化は、単元構成を意識するようになることである。単なる小単元名が小タイトルになるのではなく、生徒の学びの姿や意味がタイトルに表れていくようになる。

3年間続けてきたが、年々紀要が分厚く、生徒の姿がよく見えるようになってきた。今後はページ数を制限することを考えている。

次は、平成19年度の1回目(1月末)の実践記録収録表紙に書いたものである。

例年同様、1月末日現在での、平成19年度の実践記録です。(業務記録ではありません。)1時間の授業記録ではなく、問題解決型学習のひとまとまりです。教師の手立ての羅列でなく、生徒の立場に立って、与えられた課題からどのような「問題」を見出し、どのように解決していったのかを明らかにしていく記録です。

70分授業も2年目を迎えて長所や短所がより明確になってきたでしょうし、本年度の研究サブテーマ「協働的な学び」についても具体的な姿が描かれていると思います。今から1ヶ月間、3つの授業研究会と教科部会での読み合わせの中で、教科を越えて、また同じ教科の立場から質疑応答を繰り返す中で、実践の意味を問い直し、主張を明確にして紀要原稿へと高めていきたいと考えています。

平成17年度から本校に勤務の先生方にとってはもう3本目です。これは先生方オリジナルの、言わば「名刺代わり」のようなものです。1年ごとに実践、及びその記録がどのように変化しているかも感じられると楽しいです。

至民型の問題解決型学習－質の転換をより明確に－

講義形式中心の授業から脱却するため「問題解決型学習」を推進してきた。福大附属中における「探究」のような位置付けだが、公立中らしく学習指導要領の中の言葉を用いた。ただし「問題解決学習」としなかったのは、主題を追究していくような学習もこれに含めたかったからである。授業研究会や実践記録の執筆を通して、「至民型」の問題解決型学習とはどういうものだろうか考えるようになった。トピック的に行われる「課題学習」とか総合的な学習の時間の探究的な調査活動ではなく、普段の教科の授業の中で授業のねらいを達成するための問題解決型学習である。教師が課題を与え、解決していく中でぶつかる疑問や問題、それは生徒によって違うこともあるが、このような問題を見出し、場合によっては協働的に解決していく、この過程を「至民型」と呼ぶことにした。従って、特

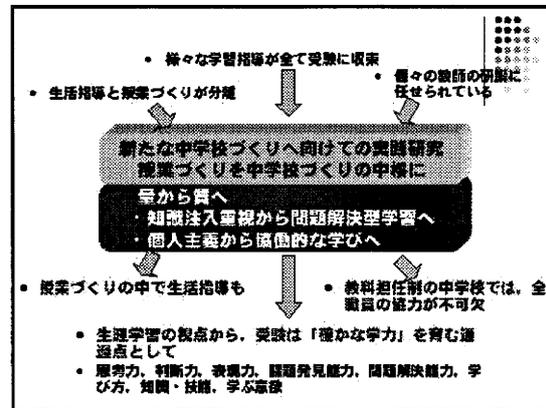
別な授業でなく普通の授業で展開されていくものである。

3 70分授業を開始し、授業の質の転換を図る（平成18年度）

2年目、校長、教頭、教務主任、生徒指導部長等、メンバーが大幅に入れ替わる。この年から研究主任となるが、学校改革の歩みを止めないように形にしていく。年度初め福井市の渡辺教育長より移転開校に向けての研究課題や方向性の話を聞く。その中で、この2年間、全力で、全職員で研究と実践を繰り返し、問題提起や研究経過等をどんどん発信して行ってほしいと告げられる。新管理職の先生方とも相談し、公開研究会を開催していく。授業の質の転換について、世に問いながら進めていく。附属中時代の同僚で、前年度は市教委で至民中担当だった大橋巖氏が異動してきたことも心強かった。舞台は整った、という感があった。

70分授業・20分ドリルタイムのシステム変更で質の転換をねらう

平成17年度から始めた授業改革であるが、方針をより明確にするために、1時間の授業時間を70分間に変更した。今まで受験指導に傾倒していた授業を、思考力、判断力、表現力、課題発見能力、問題解決能力、学び方、知識・技能、学び方といった『確かな学力』を培うための授業へ、質的な転換をねらったものである。講義形式



なら50分間集中力が保てていても70分間は続かない。自ずと授業の質的な転換が求められることになる。知識注入重視から問題解決型学習へ、個人主義的な勉強から協働的な学びへ、量から質への転換である。

そうは言っても、70分授業に決定した前年度の研究会は紛糾を極めた。1月の研究会で提案がなされたときの「何を言い出すの?」といった反応が忘れられない。「今(50分)でさえ集中できないのに、70分なんて集中できるはずがない。」という自分の授業の実態を語る教師、「長い時間で回数が減るより、短い時間で何回もあった方が良い。」という英語科、「一体誰が考えた?一部の人間が考えたことを押しつけようとするのは許せない。」という決め方に疑問を抱く教師、「この時期(1月)に変えていこうと言ったって、保護者への説明が出来ない。」という学校の立場を考える教師、また中には「今ですら忙しくてたまらないのに、この上に毎日教材研究や授業の準備なんてやったら倒れてしまう。」という生々しい意見まで出る始末。擁護派も何名かいたが、1週間持ち越し、その間に各自考えることとした。さて次の研究会。前回とはうってかわって賛成派が増える。「いつも良いところで授業が終わってしまって中途半端。そういうことが無くなる。」「話し合い活

動を組み込みたかったけど今まで出来なかった。」「実技教科は本当は2時間続きでやりたかったけれど、70分でいろいろな可能性が出てくる。」「問題解決型学習を進めようとする、50分ではやっぱり中途半端」という意見が次々出され、最終的には「何かいろんなことが出来そう。愉しみ。」という意見が大半を占めるようになった。「教科書も変わるこの年は変えるチャンス。どうせ新しい教科書に沿ったカリキュラムを作らないといけないんだから」という教頭の言葉が最後の一押しとなり決定された。一番問題になりそうな授業間隔については、50分×3回を、70分×2回+20分と、ドリルの時間を増やし、週3回の線を守っていくことで了解がなされた。

現在の中学生の総体的な傾向ではあるだろうが、至民中学校の生徒は、部活動には積極的に取り組むが、それと比べると学習に対しての意欲は低く、自ら進んでやるというよりも指示待ちの生徒が多い。移転開校を契機に、学ぶ意義を実感できるような授業を構築しようという思いで開始したのである。生徒指導や受験指導、部活動、毎日の様々な雑務に追われていた現状から、新たな中学校づくりに向けて授業づくりが中学校づくりに中核に位置付けられ、真正面から望むことになった。

天秤のモデルを用いて等式の性質を学習する。理解できたらそれだけを用いて解くことができる簡単な方程式を学習する。次はレベルの高い計算。順番に与える問題や時間がプログラムされている。計算練習を十分にこなした後、方程式を利用して解く文章問題。これも簡単なものから難しいものへと与える順番が決まっている。・・・

これが普通の「方程式」の学習。けどここには必然性がない。学ぶ意味が見つからない。単なるドリル学習になってしまっている。方程式は「何か数値が決まっているけど分からない、その数値を知りたい」時に表れる概念。私は「この数を求めよ」というタイトルで最初から最後まで「数当て」の方法を探ることで一貫するカリキュラムを組んでいる。何とかして簡単に解くために、等式の性質や解法を探っていくのである。

70分授業によって、生徒主体の学習活動が中心となる授業が増えてきた。失敗も含めて、まず課題に取り組んでみることで疑問や解決に迫られる問題が生まれ、本当の意味での学習動機が生まれる。これが至民型の問題解決型学習である。調査活動や操作、実験などにじっくりと取り組むことができ、活動の中でこそ『確かな学力』が培われるという実感が持てた。今まであまりにも「結果」ばかりに目がいていたが、「過程」こそ重要であることが認識されていった。

また、導入からまとめまで1コマの時間内で学習内容を収めることが可能になり、思考の連続性が保障されるようになった。生徒の声を拾ったまとめや自己評価も可能になり、まとまりが良くなった。さらに、今まではバラバラに行っていたことを総合的に扱うことが可能になった。「読む」「書く」と「聞く」「話す」、「鑑賞」と「制作」「表現」、「基礎」と「応用」といったことを総合的に扱うのである。より実生活に即した形で学習が行われるようになった。時間の使い方は状況に応じていろいろ工夫でき、教師のオリジ

ナリティが発揮しやすくなった。実習等の準備にかけられる無駄な時間も減って、時間を有効に利用できるようになった。

生徒の反応も予想以上によく、グループ活動が増えて、授業が分かりやすく楽しくなったという声がたくさん聞かれるようになった。

しかし、70分授業の探究的な授業ばかりでは、技能や知識の定着に不安が残る。そこで、毎日20分間の「ドリルタイム」を設定し、1週間で5教科をこなすサイクルにした。教科担当が入る教科の授業である。この時間には単にドリルをこなすだけでなく、家庭学習のやり方も指導するように共通理解した。

必要不可欠なカリキュラム研究に着手

70分授業を開始するにあたって、教員の間でカリキュラムのことが問題になった。1時間毎の完結した目標の設定は当然だが、生徒活動主体の授業ばかりしては教科書の内容が全て履修できないのではないかという心配がある。そこで、本当に意味のある活動を吟味・選定する必要性が出てきた。説明で終わらせる部分や、練習が必要な部分などを組み込んだ、思い切った単元の再構成が必要である。ちょうど教科書の内容も大きく変わる年度だったので、カリキュラム研究に着手した。実践を行いながら同時に作成していく、「学習履歴」としてのカリキュラムである。

1つの単元を1つの枠組みで示して時系列に並べたものを作成し、全教科分を全教員に印刷配布した。単なる小単元と時配の羅列でなく、実際の生徒活動を明記する。中心となる学習課題や学習活動、簡単な単元全体の流れ、教科の特性に応じて培いたい力や学習環境等を盛り込んだものである。学習の結果（内容）の記述だけでなく、過程（活動）の記述である。他教科のカリキュラムを見ることは普段はほとんど無かったので、問題解決型学習の進め方や単元構成の仕方、記述形式に至るまで参考になる点が多い。これは随時更新していく形をとっている。

次は、平成19年度最初にまとめた全教科カリキュラムの表紙に記載した文章である。

このカリキュラムは、平成18年度よりはじめた70分授業の実践履歴を基にして、省察し、再構成したものです。時系列で単元毎に1つの枠でまとめ、何コマかけて、生徒がどんな活動をしてきたか（あるいは来年度させようとしているか）を、なるべく具体的に示しました。中心となる課題、学習活動、単元全体の大きな流れだけでなく、必要に応じて、培いたい力や目的なども書き入れています。大づかみではありますが、追体験できるようなものを目指しています。

福井市中学校教育研究協議会の先生方の協力を得て、まず1学期分を12月末に作成し、協議をしてから2学期分を作成しました。作成に関する基本理念も教科毎に別途作成してあります。

授業は生き物です。授業者の「揺るぎなさ」が逆に授業を形骸化させます。授業と同様に、このカリキュラムも動き続けます。省察して再構成していくことを前提としているのです。平成19年度はこれを基にして授業実践し、より質の高いものを目指します。同時に、教科を越えて至民中学校の目指す授業と培う力を明らかにしていきます。

生活のリズムの構築—学びの構築を演出する—

70分授業開始と同時に休憩を15分間にしてゆとりを持たせた。また、朝のスタートはこれまでは学年毎に学習や読書などまちまちであったものを全校一斉朝読書に改めた。さらに自分の意志で積極的に授業に望む生徒の主体的な活動を促し、また自己管理能力を培うために、ノーチャイム（1日3回のみ鳴らす）にした。教科センター方式の千葉県打瀬中学校訪問（平成17年度）の折、チャイムで生徒を切り捨てないためにノーチャイムは有効であるという話を聞いた。10分間の休憩時間で少々の遅れは出る時もあるが、教科教室まで授業を受けに来た生徒を寛容に受けとめる教師の姿勢が大事だということである。ちなみに打瀬中は制服も校則もない。ただしハイソサイアティに支えられている背景は本校とは基本的に違うものである。

全校一斉朝読書で始まり、午前中に15分間の休憩を取りながら70分授業を3コマ行い、午後は20分ドリルタイムの後70分授業を1コマ（総合的な学習が中心）行う。じっくり取り組む授業と短時間で継続的に行う授業を組み合わせながら、静かな学習環境の中で、落ち着きのある1日の生活のリズム、1週間の生活のリズムを構築していくことを重視した。

大概の中学校はそうであるが、今まで朝の時間の使い方は学年毎独自に決めていた。ある学年は朝読書、ある学年は朝学習、という具合である。しかし、特に朝学習については大変疑問に感じていた。プリント学習を行い各自が答え合わせ、そして担任が点検、という流れで何の疑問もないまま行われていた。しかし、教科担任の指導が入るわけではないので、生徒にとっては単に決められた作業をしているだけになっていることが多い。宿題についても同様で、学年担当や学級担任から教科の課題が出されても俗に言う「目くら判」を押して返す繰り返しになりがちである。もちろん何もしないよりは良いと思うが、教科学習であるからには教科担任の指導が入るべきだと思う。これまでの生活ノート（1日の感想や連絡を書くノート）には英単語や漢字を書く欄があったが、それを家庭学習の計画を記入する欄に改めた。教科学習を教科へ戻す、担任は学習習慣の確立に努めるという流れを重視した。しかし、基礎学力を定着させたいという学級担任の気持ちもよく分かり、現在でもバランス感覚が必要な項目である。

教科を越えた授業研究部会の組織—日常的な授業研究—

授業改革を学校づくりの中心に据えるために、平成17年度の「授業づくり」「学級づくり」「心づくり」という研究部会を、「授業研究部会」に統一を図った。それぞれを区別するような名称はあえてつけずⅠⅡⅢとし（ただし、なかなか動きにくいので、軽くそれぞれの課題は設定した）、全てが授業参観や70分授業に関する情報公開、実践記録の読みあわせをする。日常的に授業の話題がなされ、徐々にではあるが実践と研究がつながっ

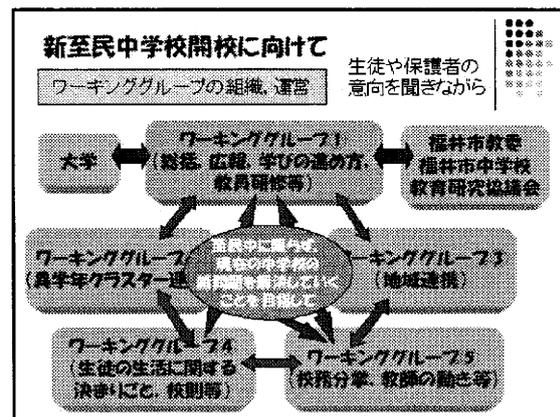
ていくことを実感した。

平成 17 年度も、「授業」に研究の基盤を置こうという共通理解は成されていた。従って「学級づくり部会」では学活の時間の運用について、「心づくり部会」では全ての授業における心構えやルールについての研究が成された。しかし学活の授業研究も単発で終わったり、授業を受けるルールについても上辺だけという印象はぬぐい得ない。後に拠点校である本校の担当となった淵本幸嗣氏（福井大学大学院准教授）は平成 17 年度の研究紀要について『学級づくり研究部会では、互いを認め合い高め合う集団づくりを研究課題にしているが、1 学期に 1 回の学級活動の時間で話し合い活動を実現するとは思えない。』と述べている。私自身も当時同じ思いを持っており、日常的に、授業の場面でコミュニケーションを取っていくことが重要であると考えていたことが、この組織改革のベースにある。

とかく研究部会というと、研究課題を設定し、仮説、検証、という流れになるのが通常である。それぞれあえて棲み分けをせず、皆同じことをやるとどうか。小グループにすることで各自の思いを気軽に伝えられ、本音で話が出る。疑問点や不明瞭なことが出てきたら、他の部会の人に聞けばよい。また、研究成果を強要しないことも重要である。何か 1 つでも得られるとことがあればそれがその教員にとっての成果であろう。授業でも、知識を注入するだけの一斉指導の時代は終わった。研究部会も同様に在り方を改めていく時代である。

ワーキンググループで新至民の準備開始

毎日の授業研究だけでなく、新至民中に向けての様々な準備をスタートさせる。この研究母体としてワーキンググループを組織した。幾つかのグループに分かれて準備を進めていくべきであろうが、1 つのことにも様々な用件が絡んでくるため、最初の段階では既存の研究推進委員会のメンバーに大学と福井市教委の担当者を加えてワー



キンググループ①【総括・広報】とし、授業研究の推進や新しい学び方の提唱、公開研究会の準備、地域・保護者への広報、各ワーキンググループの調整等、準備の中核を担う形とした。留意したことは、平成 20 年度以降のためということだけでなく、平成 18 年度の研究も同時に担うことである。

ワーキンググループ①で起案し、【異学年クラスター運営】を担うワーキンググループ②、【地域連携】を担うワーキンググループ③をスタートさせた。ワーキンググループ②では異学年クラスターを組織し運営していく上での課題や問題点を協議していったが、その中で、特活を中心にどのように学校文化を築けるか、意味ある行事は何か、といったこ

とまで話題に上るようになった。これは、平成20年度より新設した「Cタイム（行事の成功に向けて培いたい学力を明確にして準備・学習を進める時間）」の発想に繋がっていった。ワーキンググループ③では地域開放エリアの運営を見据えて、地域が支える学校、地域を支える学校という双方向の取組を模索していった。社南公民館と連携を密にし、新たな催しを作るのではなく、現有の地域行事への中学生の参加を促したり、学校の授業や行事をどんどん公開したり、『みんなで行こさ至民中へ！』というリーフレットを発行して気軽に学校へ足を運べる雰囲気を作ったりしていった。これらは随時必要に応じて立ち上げていくことを考えていたので、全員参加ではないところが現在とは異なっている。

他にも生徒の生活に関することや、校務分掌のスリム化など課題は多いが、次年度に持ち越すことになる。生徒や保護者の声を聴きながら、ゆっくり進めていこうと共通理解した。

ワーキンググループ①は、それぞれのグループ長や様々な立場から集結した至民中の心臓部である。しかも管理職も入ることで、協議が持ち越しされるのではなく決定されていくことも多かった。この会の運営・進行を私が担当した。大学、市教委、管理職とのスムーズな連携に心掛けた。また、会の中では年齢や経験年数の違いに関係なく、発言を求めた。研究と運営を別物と捉えるのではない、至民中の実践コミュニティの骨格が形成されたと言える。

「新たな中学校づくりに向けての公開研究会」で学校改革の過程を公開する

研究内容を至民中の内部に閉じておかないで、随時広報して広く意見を求めるために、見出しの公開研究会を開催した。結果でなく、過程の公開である。名称はストレートに「新たな中学校づくりに向けての公開研究会」とし、平成18年度は2回、平成19年度は1回開催して、県内外からそれぞれ100名程度の参加を得、注目の高さを実感した。第1回(6/29)は研究サブテーマ「学力充実をめざした新たな授業づくりを通して」、20分ドリルタイムと70分授業の全教科公開、生徒のアンケートをベースにした研究経過報告を行った。第2回(10/26)は「「学び舎」としての中学校本来の姿を目指して」、物珍しさから抜け出した70分授業を公開して生徒の実態を見てもらうのと同時に、生徒の学びを支える教師の協働研究システムを提案した。福井大学の松木先生には「21世紀の中学生に培う学力を問い直す」というタイトルでの提案も頂いた。平成19年度の第3回目(10/24)は、「協働的で **Reflective** な授業と授業研究会の提案」で、全教科の授業公開と授業研究会、そして授業研究会の持ち方そのものの提案を行った。

推奨している「内部への日常的な公開」は、本校の教員同士では生徒の実態については共有されているので、授業技術の是非ではなく、生徒の立場に立って授業を見て共通の悩みを発見したり、生徒の学びの姿を元に、教師に寄り添うことが比較的容易に出来る。しかし見出しのような一般公開は、経緯を知らずその刹那で判断されるので、授業準備には

普段よりも数段神経が注がれるものである。従って、普段の授業の在り方を見直すきっかけとなる。公開研究会が単発で行われると、苦勞ばかり多くて終われば同じで易無し、ということになる。今後、公開研究会を年間計画に明確に位置付け、生徒も教師も地域もこの機会を、むしろ積極的に有効に利用していくことが求められる。

「福井市中学校教育研究協議会」で学校改革の気風を

平成17年度に、福井市の中学校教諭で各教科2名ずつにより、福井市中学校教育研究協議会が組織された。1年目は各教科毎に新至民中の教科エリアの運営についてのワークショップが中心であったが、2年目を迎え、カリキュラム開発や授業研究へと研究が進んでいった。この年の活動の中で特徴的なことは、協議会のメンバーの中で教務主任や研究主任等を経験された先生方に、ワーキンググループ①への参加を2回お願いしたことである。授業改革や教科センター方式、異学年クラスター運営に関するフリートーキングで、これまでの経験を元に新たな取り組みに関するご意見を伺った。70分授業に関しては、「総合的な扱いが可能である」「1時間完結の授業が出来る」「実験などの準備の時間も十分に確保できる」「意味のある学習活動を組んでいくようになる」「生徒活動中心の授業で生徒が変わる可能性がある」「生徒の状態を見てもだんだん良くなっている」という意見が多く、理解が得られだした感触を受けた。「最も重要なことは教師の意識改革であり、教師の深い教材研究とカリキュラム構成力が求められる」というように、本質を捉えた発言が多かった。しかし、「習得させなければならないことも多くあり、ドリルタイムとの関わりの中でどうやって定着させていくかという課題も残る」「理想(21世紀に求められる学力の育成)と現実(受験)があるので、メリット、デメリット共に発信してはほしい」という要望も出された。教科センター方式に関しては「環境を準備することが意欲や学力を向上させるのには大変有効で、その経営に教師の手腕が問われる」と前向きであったが、異学年クラスターに関しては「生徒指導上の問題が大変心配で、総合的な学習などでは生徒が混乱しないか、来年度から試行していくにしても、移転開校へ向けての「実験台」とならないように、異学年での活動が今の生徒にどんな意味があるのかを説明しなければならないだろうし、生徒や保護者の考えを把握することも必要であろう」と心配の声が目立った。

内部で進めていく立場にとっては忘れられそうな懸案事項を確認できると同時に、改革の意味が徐々に福井市全体の問題に広がっていくことが実感できた。

私は、公開研究会や福井市中学校教育研究協議会で研究概要を説明する機会を何回か得たのであるが、その内容は事前に校内の教員にも知らせず、他の先生方と同時に聞いてもらった。本当に聞いてもらいたかったのは本校の教員だったのである。「こんなことだったのか」とその時初めて意味が分かった教員もいたはずである。既成事実としてしまったかった。また、これらの研究会や協議会の分科会等の記録の作成、福井大学ラウンドテー

ブルへの参加、教育のアクションリサーチ研究会への参加（またそれらの報告会）を通して、学校内部だけに閉じない活動になる（もちろん教職大学院拠点校にという、将来を見つめたアプローチである）と同時に、研究活動の意義も感じられ、いよいよ開校まであと1年となる。

4 開校まであと1年

「学校運営」「授業研究」を両輪とした全員参加の実践研究（平成19年度）

新たな授業づくりを柱とする学校改革は軌道に乗り、教師の意識改革も進み出した。開校までの1年間は、地域への説明会、設備・備品の整理等、実務的な準備もあわただしくなるが、新至民中学校の校舎が姿を見せ、見学の機会を与えられるにつれ、「いよいよ」という実感が湧いてくる。「異学年型教科センター方式」をどのように運営していくか、各教師も考えざるを得ない状況になる。

リーフレット作成で、内外に目標の明確化を図る

本校の研究活動や方向性を、他校の教員や地域・保護者の方に広く理解してもらうために、右のようなリーフレットを作成し、地域・保護者や公開研究会の参加者に配布した。移転開校まであと1年と迫り、準備としての研究も進める必要があるが、平成19年度に在籍する生徒にとってどんな意味のある研究活動であるかを特に意識して明記した。

そもそも既存の「学校要覧」が無味乾燥なもので、何とかならないかというのが最初の発想であった。平成19年度は取りあえずこれまでの「学校要覧」も作成し、別刷りでこのリーフレットを作成したが、平成20年度はこれを合わせた形で作成し、「学校要覧」という名称も消した。いろいろな場面で、今まで慣例となっていたことを見直す活動が続けることが新しい中学校創造に繋がると考える。

これはアピールにもなったが、それ以上に本校の教員として何を目指して1年間を送ればよいのかというよきナビゲータの役割を果たした。

平成19年度福井市至民中学校
学校文化の創造「自立と共生」

生徒と教師と 家庭・地域が育つ中学校へ...

**学力充実へ向けての
学習サイクルの構築**

- 「70分授業」の充実
カリキュラム開発
問題解決型学習
協働的な活動
- 「RE Time」の工夫
家庭学習の習慣づけ

**異学年による
自治的協働活動の組織**

- 異学年協働活動の年間を通じた組織
- 生徒の組織と活動の発達し
- 課活動の充実

**新 至民中学校
開校へ向けての
準備・研究**

- 学校のしくみ、活動のありか
- 地域の文化・伝統の継承
- 法廷で、教師員
- 地域が育つ学校にむけての
取り組み

地域・保護者との連携

- 教育活動の積極的な発信、広報活動
- 学校開放、授業公開
「みんなで行こう至民中へ！」
- 地域活動への参加

**自主的で
豊かな学びを
支えるシステム**

- 自主学習
- 学習記録
- 70分授業、70分授業
- 10分授業、10分授業

21世紀に求められる学力を培おう

- 「創造的で、高度な知的活動を、協働して実践
していく社会」に対応する能力
- 知識と共に、技能を磨きあげていく力
思考力、判断力、表現力、読解力、読書力
「生きる力」を育むことこそが、真の学力
- 協働的な協働活動

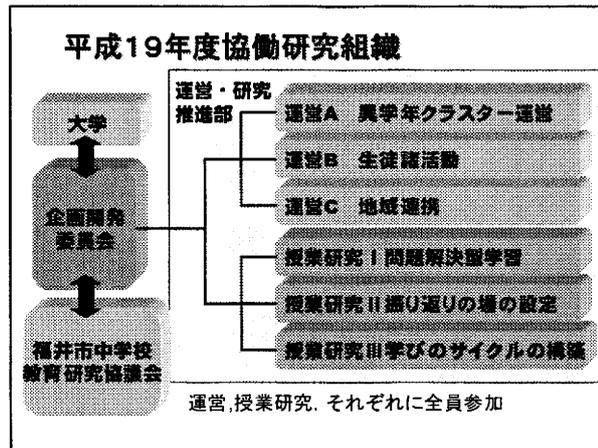
21世紀に求められる資質を高めよう

- 実働の新しい社会を生き抜くためのたくま
しさ、協働性
- 健全な精神、内徳
- 社会の一員としての自覚、責任

いろいろな活動の中で、生活にわたって学び続け、
社会に参加する力を培おう

研究組織改編 分掌のスリム化

大きく変更したのは研究組織である。前年度授業研究部会ⅠⅡⅢを立ち上げたが、それは継続し、さらに前年度のワーキンググループに変わるものとして「運営部会ABC」を立ち上げた。Aは異学年クラスター運営について、Bは生徒諸活動について、Cは地域連携についてであり、全教員がいずれかに参加し、準備と同時に平成19年度から実施できるもの



については実施していく、その計画と運営を担当した。これが運営・研究推進部であり、全員が2カ所に名前を連ねる新組織である。この研究の時間を確保するため、毎週月曜日は部活動を休止し、職員会議のない週は原則として研究会を行うことにした。全体研究会はなるべく早く切り上げ、週毎に各運営部会、各授業研究部会、といったように会議の時間を確保していった。また、6部会の責任者と、管理職、教務、部長により「企画開発委員会」を組織し、運営・研究に関する企画、調整、広報、総括を担当した。この委員会は前年度のワーキング①にあたり、福井大学関係者、福井市教育委員会担当者も随時入り、協働研究の母体となった。この名称も、いわゆる「研究推進委員会」とは違うものにしたかった。イメージは学校に閉じたものではなく、一般企業の企画立案グループである。メンバーも年功序列ではなく、若手も起用して、いろいろな意見を取り入れられるようになった。念頭には世代継承のことがある。この組織改編により、全員が授業研究を進めるのはもちろん、新至民中に向けた準備に絡んだ何らかの運営活動に参画することになった。各部長が独自に運営・研究を進めていける体制で、ボトムアップ式になったと考えている。

このように運営・研究に力を注ぐには、これまで行ってきた様々な校務分掌をスリム化する必要がある。例えば保健安全や清掃、給食など毎日の生活に関わることは実際は学級担任が指導に当たるので、学年毎に担当者の名前を出した「清掃部会」「給食部会」といった分掌はやめ担当者を1人にした。同じように道徳教育や視聴覚・情報教育に関しても、学校全体で担当者を1人にして教科主任と同様の扱いとした。これらのことで、余計な打合せが無くなり、責任の所在も明確になった。校務分掌の組織表については、毎年実態を考慮して更新していく。

サブテーマ「協働的な学びを創る」

70分授業を導入して問題解決型学習を進めているが、授業づくりの課題としてコミュニケーションの取り方が稚拙であることが挙げられる。特に意識の低い生徒が集まってしまったグループではなかなか発展的な話し合いは望めない。どのような課題でどのような支

援が必要か、どのようなコミュニケーション体験を積み重ねればよいかを研究の俎上に挙げた。同じ教室内での等質、異質の編成の工夫や、様々な場面での話し手と聴き手のマナー面の指導、さらには教室を越えた学年全体や、異学年集団でのコミュニケーションの場面を特活・総合的な学習などで意識的に組織していくことを共通理解する。

また、「協働的な学び」は生徒だけでなく、教員集団にも同様に言えるサブテーマである。前述の全員参加の運営・研究部会の組織によって、日常的に協働的な学びを推進していく。

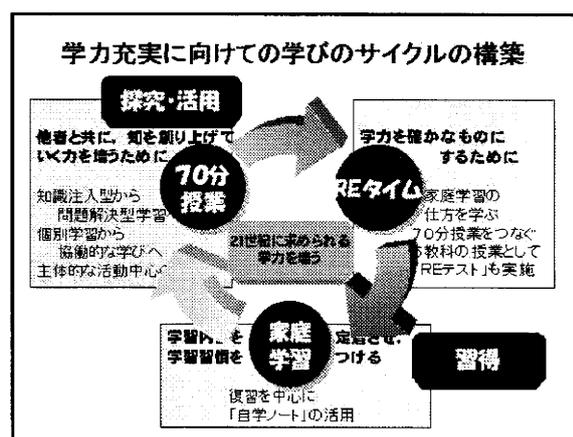
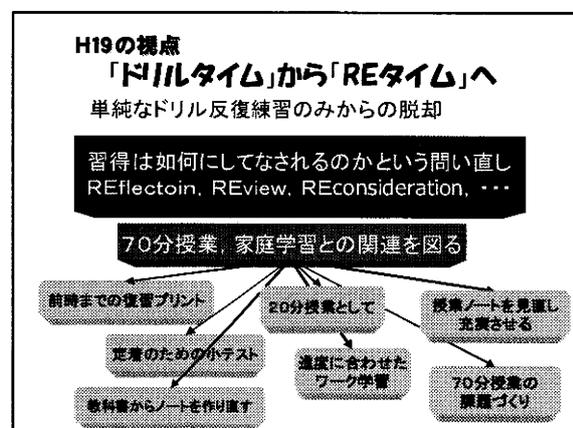
学びのサイクルの構築に向けて ドリルタイムをRE タイムに変更

生徒活動を中心とする探究的な70分授業と、習得的な20分のドリルタイムを設定して実践してきたが、なかなか学習内容の習得と学習習慣の形成には結びついていかないという課題がある。生涯学習の視点に立ち、「学び方を学ぶ」ということを強調したい。そのために今までのドリルタイムの名称を「RE タイム」と変更した。「ドリルタイム」では反復練習しかイメージできず、当然のことながら20分だけでは不十分であり、重要な家庭学習にまで及んでいかなかったという反省の上に立つ。単純なドリル反復練習のみから脱却し、習得は如何にしてなされるのかを問い直す試みである。

「RE タイム」の最大の目標は、70分の探究的な授業と家庭学習による習得的な学習を如何にしてつなぐかということである。

70分授業と70分授業をつなぐ場合も考えられる。主に[Reflection][Review][Relation]という意味を持たせている。前時までの復習プリントが一般的だが、授業ノートを見直して家庭学習の計画を立てたり、教科書からノートを作り直したり、進度に合わせたワーク学習をしたりといったことが行われている。また、20分授業として補足説明が行われたり、次の70分授業の課題づくりに利用されることもあった。さらに年間2回は、基本的内容の定着を図るために、「RE テスト」という名称で実力アップのテストを行った。努力さえすれば必ず点数が取れるテストで、学習の継続を意識させ、家庭学習の意欲向上にもつながるものであった。

このRE タイムを接着剤として、学習のサイクルを家庭学習を大きく巻き込んだも



のにしていく試みを今後とも続けていく。

企画開発委員会通信『学び舎』で、授業の価値を共有する

どのような授業が行われているか、どのような力を培うことを目標にしているのか、広く地域・保護者に知ってもらうために、平成19年度より企画開発委員会通信『学び舎』の発行を始めた。A4 1枚で、生徒の活動や反応を盛り込んだ具体的な授業場面を紹介している。新至民中に関するQ&Aや全国学力調査の分析等、学習に関することで地域・保護者に伝えたいことも随時掲載している。平成20年度からは執筆者も明記している。広報誌なので端的にまとめないといけない。しかも保護者が読むので理念は極力控え、生徒の姿中心にする。原稿はそのまま印刷されるのではなく、授業研究部長や私の目を通り、場合によっては紀要を読むときのように簡単な質問をすることもある。そのたびまた授業構成を振り返り、授業の意味を発見する機会ともなっている。

『学び舎』も実践記録と同様、授業者が自分の授業を省察する材料であり、同時に同僚にとっても授業研究の材料となっているのである。

『Shimin Study Life (至民中での学び方)』を編集し、学びを問い直す

平成20年度4月の移転開校時に配布する、学び方の手引き書を編集した。これまでの学び方のルールは、チャイムが鳴るまでに座席について静かに授業の準備をする、人の話をきちんと聞く、挙手をして指名されたら大きな声で返事をして立つ、大きな声で話すといった、言わば作法のようなものであった。70分授業になり、これまでの型にはまったルールではない、これからの学び方に関する枠組みが必要になった。附属中には随分前に編集された「学び方ノート」が存在した。その理念は素晴らしいと思っていたが、あまりにも一時代前のものであり、新しいものも結局出せずに異動してしまった背景がある。そんな中、本校研究会に招いた柳澤昌一氏（福井大学大学院教授）による本校の研究会での「今までの授業のノウハウは機械的にまとめられているが、これからの問いを深めていく授業に関する新しいノウハウを蓄積していく必要がある」というコメントがきっかけとなった。

第1章は至民中での特徴的な試み、第2章は全教科共通の学び方、第3章は各教科編である。生徒や保護者に理解してもらえるようにコラムをたくさん盛り込んだ読み物であり、入学時のガイダンスだけでなく、折に触れて自分の学び方を振り返るために使用できる。前述の福井市中学校教育研究協議会の先生方にも制作の趣旨を説明し、協力していただいた。協議会の先生方もただ存在していたというのではなく、形として残して欲しかったという思いがあった。教科編では、「なぜこの教科を学ぶのか」から始まり、「目標、カリキュラムの意図、学習の進め方、実力アップの方法、評価について」と続き、教員にとっても、教科を学ぶ意義を考える機会になった。冊子にまとめたが、生徒への伝え方につい

では、教科毎や学年毎のオリエンテーションの他、先輩からのアドバイスということも考えられる。また、随時更新していきべき性質のもので、今回のものはこれからの叩き台だと考えている。教師と生徒が知恵を出し合って、至民中オリジナルの学び方の手引き書を完成させていく、その過程に意義がある。

手軽な読み物としての性格を持たせるべく、たくさんのコラムを盛り込んだ。教科編でも内容に関わることや学習方法に関わること、身近な話題など、各教科毎に様々な情報を盛り込まれており、著者の願いが伝わってくる。

Shimin Study Life (至民中での学び方)

第1章 至民中学校での特徴的な取組

第2章 21世紀型の新しい学び方

第3章 各教科の学び方

なぜこの教科を学ぶのか／学年目標／カリキュラム解説／学習の進め方
実力アップのポイント／評価の観点・方法

(コラム例)

【全教科共通】

- ・21世紀に求められる学力とは？
- ・分かるってどういうこと？
- ・学習は1人でやるものじゃないの？
- ・成績上位者は聴き上手
- ・生活習慣と学力の深い関係 等

【各教科編】

- ・国語を学び喜び
- ・社会科は役に立つ教科か？
- ・下手でもOK 歌は君の応援団
- ・アートで脳をパワーアップ！！
- ・日本で最初のロボットは？
- ・男子にとって家庭科とは？ 等

未知の領域「異学年クラスター制」試行

新至民中は「異学年型教科センター方式」である。今の生徒たちは少子化の影響もあり、幼少期より地域での異学年での交流があまりないまま育ってきている。その結果、人とのつきあい方が未熟で社会性が乏しく、いろいろなトラブルの原因にもなっている。平成19年度は校舎の構造上は異学年の教室は隣接していないので限定はされるものの、運営部会Aを中心にして可能な限りクラスター制を取り入れ、実施しながら来年度以降の課題等を見出そうとした。毎年の学校祭の色分けを年度当初に行い、団結行事、合唱コンクールといった学校行事や、清掃コンクール、給食コンクールといった生徒会行事でクラスター対抗にした。特に合唱コンクールは3年生が下級生をしっかりとリードし、生徒たちも達成感を感じることが出来たようである。

2学期は総合的な学習で「地域に貢献しよう」というテーマで、クラスターの小グループ毎に活動を行った。3年生は普段なら教室の中で埋もれてしまうような生徒でも、小グループの中で下級生をリードしていく役を任されるという機会を得た。地域にどう貢献できるかを考え実行するだけでなく、上級生としての自覚と責任を感じ、学校を自分達で運営しているということが確かめられる総合的な学習であった。

組織のことや実際の毎日の生活のことなど課題は多いが、クラスター制の意義は十分に意識された試行となった。

教員のブレインストーミング

教職員の間で70分授業の導入と同程度に強い抵抗があったのが、平成20年度から本格的な始まる「異学年クラスター」である。私自身も最初に構想を聞いたときは、現在の学年制が強い中学校では到底運営不可能、理解不可能、いや想像さえ不可能のことと感じた。そんな私の心に落ちたキーワードは松木健一氏の「5つの小さい学校」である。確かに小規模の学校がそれぞれに自治意識と組織を保つならば、今までには考えられなかったような学校が実現するに違いないと予感したものである。

実現のためには教職員の意識改革と組織の変革は欠かせない。「教員組織のベースをクラスターに置く」ことを前提にして、企画開発委員会や全体研究会に諮っていった。疑問や問題点が次々出される。まず第1に、「今まで学年指導部で対応していた生徒指導上の問題は誰が解決するのか」「いじめにつながらないか」「例えば、他の学級へは入らないと指導していたことを180度転換して、混乱しないか」「生徒の情報が伝わらない」といった生徒指導上の問題点をほとんどの教員が指摘する。指導は全員でする、各クラスター毎にステーションがあり、今までより生徒に近い状態で終日行動するから今までより目が行き届く、というように、前向きに捉えていくしかない、と共通理解する。第2の問題点は、「今まで学年で出していた宿題とそのチェックはどうなるのか、無くなるのか」「進路指導や成績処理はどうするか」といった学習に関する問題。これに関しては、教科指導は全て教科センターで行う、もちろん宿題もそれぞれの教科からで、3年生の受験指導と、事務的な成績処理は学年で、と役割を明確にする。「教科の宿題の提出状況を担任が把握出来るか」という問いも出されるが、今までと同じであることが確認された。第3の問題点は、「今まで学年会の時間があったがどうなるのか」「クラスター会の時間が出来るのか」「クラスター主任と学年主任の関係はどうなるのか」といった教員組織とシステムの問題。クラスター会の時間は確保するが、学年会の時間は3年のみ、あとは放課後に行う、クラスター主任は小さい学校の校長のようなものなので担任ははずす、会計は学年毎に項目が違うので学年毎に、あとはやってみないと分からない、という感じである。職員の居場所も話題になり、朝読書から放課後までは各ステーションにいることになる、校務センターは誰もいなくなり、電話の対応も難しいと問題点が出される。しかしこれについて

は、印刷室が校務センターの隣であることから、あまり心配はしていなかった。ステーションに冷蔵庫や湯茶の準備をしないことにすれば一層確実だと踏んでいた。

さて、これらの議論をしながら私は、まだ従前の学年指導体制ありきで、それをどのように分担するかという発想でしかないことを感じていた。指導しなければならなくなるような状況をなくすような異学年クラスター運営であるはずなのに、教員の囚われから簡単に逃れられない。「小さな学校」をそれぞれが円滑に運営していくための横の連絡を意識し、平成20年度実際やりながらシステムを構築していくしかない、と共通理解した。

これらの議論での思わぬ収穫は、地域や保護者、他校の教員から同様の質問が寄せられたときの対応にそのまま活かされたことである。教員同様なかなか従来の中学校像から離れられない意見がほとんどだが、いろいろ心配をしてもらえることは有り難いことである。

生徒へどのように説明していくかも重要な課題であったが、これは生徒会担当の数学科山内義幸氏が見事にやってのけた。教職生活6年目（武生工業高校3年、至民中3年目）を迎え、至民中1年目は講義中心の授業ばかりだった授業が2年目から180°転換していった若手教員である。生徒会執行部に働きかけ、全校生徒用にプレゼンを作成、新しい生徒会システムの提案を行った。彼の中心理念は「係や委員だけの活動でなく、全員を巻き込んだ活動に」である。クラスター制というシステムを最前面に出すのではなく、現状の問題点から新しいシステムの提案を行った。研究会でのブレインストーミングが見事に活かされている。予想されたように3年生からは反発する意見が多数出されたのだが、全校生徒に示しておくことは重要なステップとなった。

授業の視野を広げた「親子で学ぶ70分授業」

授業参観はどの学校でも行っている。より授業のねらいを実感出来るのではないかとという理由で、はじめて見出しのことを行った。70分授業は生徒活動が中心となるので、見ていると長く感じられるものだが、実際に体験することで授業者の意図や本校がねらっている培いたい力が見えてくる。実際、没頭してしまって時間が短く感じられたという感想が多かった。また、将来、カリキュラムの中に地域の方と一緒に学ぶ公開講座（平成20年度に早くも実現した）の様なものを組み込む可能性が感じられた。

ちなみに私自身も3年生で実施した。1月という受験直前の時期ということもあり、飛び込みの教材は使わず、進度通り三角形の相似の証明を行った。既習事項（証明で用いて良いことがら）はあらかじめ生徒にプリントにまとめさせておき、それをを用いて与えられた課題をグループ毎に証明をし、教師に説明に来る。無作為な指名による教師の質問にも答えられたら次の課題に取り組む。保護者も1つのグループを作り、解決できたら次の問題を取りに来て、生徒たちのグループと競うという単純極まりない授業形態であった。最初はペースが遅かった保護者グループも時間と共にどんどん加速し、全体でも2位の好位置につけた。70分授業終了後も問題から目を離さない集中ぶりであったのが印象深い。

《保護者の声より》

〈音楽に参加〉70分授業を初めて受けさせていただきましたが、時間で区切りながら集中力を途切れさせないように考えられたプログラムで進められていることがよくわかりました。徐々に授業を受けさせていただき、とても新鮮に感じました。思いっきり声を出して歌ってリフレッシュできました。

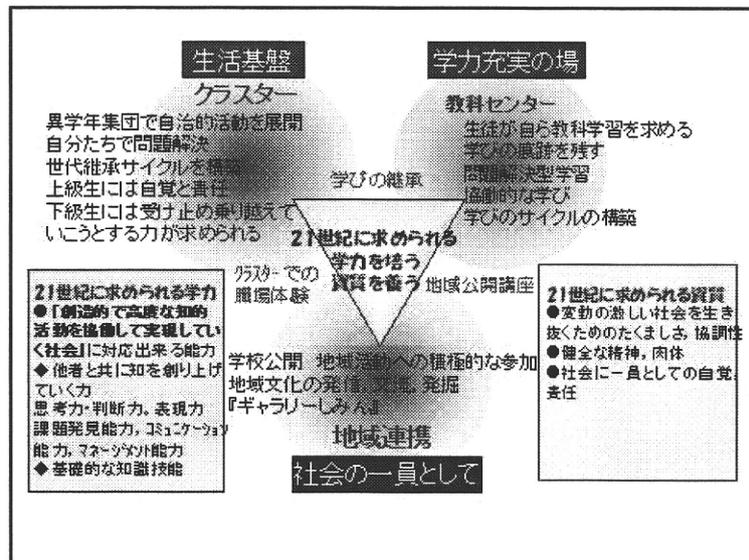
〈理科に参加〉現実的な地震のことでしたので、あっという間の70分でした。70分と聞くと長いような気がしますが、落ち着いて深く勉強できるのでよいことだと思います。久しぶりに楽しい勉強をさせていただきました。ありがとうございました。

〈国語に参加〉国語の70分授業に参加させていただきました。子どもが自分の名前の文字の意味を調べたり、名付けの意味を考えていました。後で親も子どもたちの横に行き一緒に話し合いましたが、照れくさいながらも楽しかったです。70分だと時間に余裕ができて、考えることも話し合いもじっくり落ち着いてできるところがよいと思いました。

〈数学に参加〉70分授業受けさせていただきました。数学の70分、長いという先入観で入りました。子どもたちは班ごとに、保護者はみんなで相似の問題を解くというものでした。あっという間の70分でした。久しぶりに頭を使い、楽しい時間でした。ありがとうございました。

5 異学年型教科センター方式として移転開校（平成20年度）

通常の箱形ではなく曲線で囲まれ、オープンスペースがいたるところにある校舎が完成し、4月1日に移転開校。「ミッション2008」として校長より「発信！新生至民中教育」と看板が掲げられる。学力充実の場としての「教科センター」の運営、生活の基盤としての異学年集団である「クラ



スター」の他に、校長と運営部会Cを中心に準備を進めてきた、社会の一員として生き抜くための「地域連携」の3本柱で、21世紀に求められる学力を培い、資質を養うことを重点目標とする。それらが単独で機能するのではなく、つながり合って、総合的に機能していくことを共通理解した。この3年間で積み上げてきたことを、新しい校舎で試行錯誤しながら高めていく。

研究テーマ「学びと生活の融合－異学年型教科センター方式を運営する－」

本年度の研究主題である「学びと生活の融合」は、生徒指導と学習指導を別物と捉える

のではなく、学んでいくことが生活を創る、生活の中に学びがある、ということ、特徴ある校舎を使って具現化していこうというものである。

学びに関して研究を続けてきた問題解決型学習や、協働的な学び、創造・参加型の学習の視点をそのまま生活にも波及させる。ルールなども自分達で創り上げていけるとよい。また、受けとめ、乗り越え、創り出していく世代継承サイクルを、生活面だけでなく学びの面でも活用していく。学びも生活も、様々な能力や個性、生活体験を持った人とのコミュニケーション、コラボレーションを重視し、これからの社会を生き抜く力とする。これまで学校内で閉じていたことが、家庭や地域も巻き込んでいくのである。重点目標の3項目を結びつける視点となる。

松木健一氏はこのテーマについて、「学びも生活も、活動を通して自己の中に再構成され、成長の跡を刻む。」と述べている。

教科センターの運営

ほとんどがガラス張り、あるいは仕切りのない教科教室での授業がスタートする。教科教室の中央にはオープンスペースも配置されており、ステーションと合わせて「教科センター」らしい空間が出来上がっている。ここでどんな授業が展開できるか、教師の腕の見せ所である。

数学エリアは特に設備で要求したものはなかった。スペースとテーブル、ホワイトボードで意見を出し合いながら授業を構成していこうと考えていた。私が通常使用している教室は五角形で、しかも長い2つの辺が曲線で黒板と垂直でもない。ここでは今までのような6×5と整然と机を並べること自体が不自然である。従って、グループ毎に座席を組み、黒板には極力背を向けられないような状態を通常の形態とした。それぞれのグループがホワイトボードをもち、グループ活動の際は自由に書き込む。模造紙や画用紙にグループ毎にまとめさせることもあるが、ホワイトボードはその際も下書きのように使用される。問題はホワイトボードを使用させるタイミングである。

例えば正負の数の乗法で、全体で例を示しながら $[(+)\times(-)][(-)\times(+)]$ を学習すると、次はどうしても $[(-)\times(-)]$ を考えたくなる。そのタイミングを見計らって「ではグループでホワイトボードに・・・」と言えばすぐ席を立ってホワイトボードに集まる。一見すると学級崩壊しているようにも見えるが、当人たちはいたって真面目である。いろんな説明の方法が考えられるが、教師に説明したり、全体に紹介したりして、最後は自分のノートにまとめる。これが通常の流れである。模造紙や画用紙を作成するときはエリアのテーブルを用いる。また、各自問題練習をしているときは、エリアでは、スピードに応じて出来た生徒から答え合わせや、分からない問題の質問に教員が対処する、ということもある。いずれにしても、「生徒自らが動く」授業を目指している。

学びエリアの運営は試行錯誤の連続である。他教科のように数学科でも教師が作成したや情報を掲示したこともあったが、すぐに見向きもしなくなる。授業記録としてホワイトボードの写真とそれに関連する問題を掲示したり、数学係が調べたインターネット上の数学関連の Web ページの紹介、パズル的な問題、「このノートが成績を上げる」というタイトルでの生徒のノート紹介等、いろいろ試みているが、これに生徒が食いついた、という実感が湧かない。1 回見たらもう見ないので随時更新していくことの重要性は理解しているつもりだが、なかなか難しいというのが現状である。ボディブローのように 1 回見るだけでどんどん更新していく情報と、テスト等に直接反映させる情報、パズルなど生活と結びついてかつその場で考えたり試行できるもののバランスをとって運営していくことが今のところは必要だろうと考えている。

後にも触れるが、新至民中は地域開放エリアをもつ、地域連携の在り方を提案する学校でもある。前年度実施した「親子で学ぶ 70 分授業」を拡大し、地域公開講座を 6 月 28 日に実施した。地域の方も中学生と一緒に学ぶことで、地域の方も知的活動に触れると同時に、地域の方が学んでいる姿を目の当たりにすることで中学生も学ぶ意義を感じ取れるのではないかという思いである。

1, 2 年生全学級の公開講座で、「至民中学校校歌を書で表そう」「みそ汁にだしは必要か」「シューベルト『魔王』の魅力を探ろう」「ふるさと福井の人々を学ぼう」といった、魅力あふれる講座が拓かれる中、私は今回は飛び込みで「電卓名人への道」という講座を開いた。電卓を使いこなせる人はそうはいないだろうし、十分に数学の教材として成立すると考えた。説明をしてその練習をしてみる（もちろん相談はあり）、難問はホワイトボードに書き込みながら頭を整理する、という授業構成であった。地域の方は意欲満点で、ノート持参で格闘していた。「メモを取って家でも復習しました。またこのような講座があったら参加したいです。」という感想ももらった。学校と地域が教科センターで繋がるという発想は渡辺教育長から頂いたが、こんなに早く実現するとは思わなかった。次回は 1 月の予定である。

異学年クラスターの運営

「ホーム」と呼ばれる自分の学級に入る。しかし個別の机ではなくグループ毎のテーブルである（各自の場所は決まっている）。教室の区切りは可動式のロッカー。近辺にあるホームは同じクラスターの異学年ホーム。黒板ではなくホワイトボード。ここがこれからの生徒たちの居場所である。少々狭い印象を受けるが、こじんまりとしてまとまりはよい。道徳の時間は教科教室で行ってもよいが、ホームで行われている方が多い。

日常的に異学年の親睦を深めようと、給食をクラスを解体して行ったり、帰りの会をクラスターで行ったりと工夫を重ねているが、2 年生女子を中心にあまり評判は良くない。先輩後輩の関係に疲れるという理由である。それでもクラスター意識は非常に高く、合唱

コンクールではレベルの高い発表が行われた。イエロークラスター（数学エリア）では、「先生は出ないで欲しい。自分たちの力だけでやりたい。」というクラスター委員の要望を飲み、その通り立派にまとめ上げた（もちろん影の先生方の支援は絶大であった）。研究会では、行事に対してはクラスター毎に臨むものの、授業・生活のベースとなる「学級」のまとまりの重要性をもっと意識していくことを共通理解した。構想段階から問題になっていた「学年・学級」と「クラスター」のバランスを取っていくことは、個々の教師が常に判断しなければならないことで、そのまま教員の力量形成にも直結する。

中学校は生徒も教員も多忙である。その原因の1つには行事の過密化がある。学校行事、学年行事の準備に追われ振り返りゆとりもないまま次の行事へ、そして部活へ、と息つく暇もない。本校はクラスター関連、地域連携関連と、他校よりも多忙になる可能性がある。また、行事の準備に「総合的な時間」を使うのも筋違いである。昨年度企画開発委員会での淵本幸嗣氏の助言もあり、スッキリする方法を模索していた。そこでこれまでの総合的な学習を「Cタイム(Create, Collaborate, Culure)」と名称を変えて、3年間かけて「『自分自身・学校・地域(街)』を、後輩や家族だけでなく誰に対しても『語れる・書ける』」生徒に育てていくことを目指す時間とした。地域に根ざしたキャリア教育である。学校祭や職場体験、卒業生を送る会などの行事の成功に向けて取り組み、その活動の中で、課題発見・解決能力、自分の意見をまとめる力、表現する力、資料を整理する力等を培う。

例えば学校祭。昨年度までは8月後半から準備に取りかかり、徐々に方向転換してきているとはいえ「お祭り」感覚が中心であった。今年度は6月中旬より取りかかる。クラスター毎にいくつもの部門に分かれての活動だが、最初は外部指導者を呼んだり、学習会をするなど、学校祭を創っていく上での基礎学力を習得してから準備に入っていく工夫をした。校舎のほとんど全てを使った学校祭で、規模も密度も昨年度とは全然違ったものになっている。「教科センター」「異学年クラスター」「地域連携」の3本柱が会おう場となる。これが終わったら1、2年生は本格的なキャリア教育となる職場体験、3年生は自分の進路を決定していく学習となる。1年目の今年度はとにかく実践しながらカリキュラムを整備していく。

地域連携の取組

山下忠五郎校長と運営部会Cを中心に地域連携が進められている。当初は開校して少し落ち着いてからと考えていたのだが、前述の渡辺教育長の言葉で方針が変わった。詳細は避けるが、前述のように地域にとっても生徒にとっても互いに易のある活動を、というのが方針である。従って地域公開講座という発想も出てきた。

地域で活動しているサークルの発表の場として平成19年度にスタートした「ギャラリーしみん」だが、今年度は生徒と交流するサークルも出てきた。地域住民の有志による「学

校ボランティアガイド」は、教員に成り代わって来訪団体を案内するために結成されたグループである。毎週金曜日は必ず集まってガイドの勉強会を重ねている。また、個人で文化的な活動している方々が集まって「至民アカデミー倶楽部」が結成された。写真、書道、絵画等分野は様々で、学校祭でも一角を飾る。

地域の方が学校にいるのが当たり前のようになり、地域の文化が日常的に触れられることでの効果は大きいと思う。これらの取組は山下校長個人の努力によるところが大きいですが、我々は継承し、じっくりと育んでいく必要がある。

6 おわりに —ビジョンの共有により生まれる改革の土壌—

開校したばかりで、今後やるべきことは大変多い。しかし、教師の意識改革はかなり進んだと実感している。それはカリスマが声高に引っ張ってきたからではない。外部指導者に導かれたからでもない。目新しい言葉をたくさん創ってきたからでもない。「授業の質を変えよう」という呼びかけに対して自分たちで地道な取組を繰り返す中で、ビジョンが共有されてきたのである。共有されたビジョンのもと、様々な方策を打ち立てていくことで、改革の土壌が生まれたのである。この土壌には、企画開発委員会を中心としていくつもの方策を生み出すコミュニティが生起し、オリジナルな企画を打ち出すことで土壌が耕される。この営みが現在の新至民中を支えていると考えている。しかも我々はこの2年間はほとんど異動もなく安心して語り合いが出来るような関係になっている。新至民中創出への「過程」を共有している集団なのである。今後はどんどん異動が行われるであろうが、そうなるも創り上げてきた過程を理解していくことが次のステップへとつながるであろう。逆に言うなら、我々は紀要に残していくことが必要になる。

もう1つの心配な点は、多忙感を抱くと疲労感が募るばかりか方策そのものも行き詰まることである。本校は様々な分野で先進的に取り組もうとしているので、「筒一杯」「改革疲れ」となる可能性もある。これを解消する私の使命は、意義や意味において単純化することであると考えている。どの方策も、目指す中学校像、目指す生徒像に当てはめて考えられるように整理することにより、幕末の志士のように心から意義を感じ、使命に燃えることが可能になるのではないかと思う。そのためには企画開発委員会のメンバーに重責を担ってもらい、かつメンバー同士の気軽な語らいの場を提供することが必要である。また、これを関連があることだが、システムに振り回されないようにすることである。「授業の質を変える」という原点に戻って、一番ふさわしいシステムに変えていけばよい。

今私は改めて「授業の質の転換とは？」という問題提起をしている。考え続け、挑戦し続けることが新至民中を支えていく。

【参考文献】

佐伯胖 藤田英典 佐藤学『学びへの誘い』東京大学出版会(1995)

美馬のゆり 山内祐平『「未来の学び」をデザインする』東京大学出版会(2005)

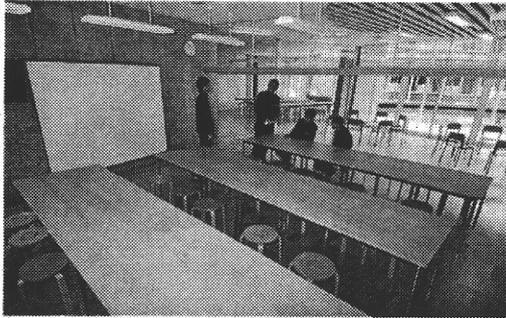
秋田喜代美「実践記録と教師の専門性」『教育 2005年12月号』

渡辺本爾「新しい至民中学校に期待するもの」『建築技術 2008年6月号』

E ウェンガー R マクダーモット W スナイダー『コミュニティ・オブ・プラクティス』
翔泳社(2002)

資料【新至民中に関する新聞報道（平成20年度）】

クラスの拠点となる「ホーム」。生徒はこの場所に荷物を置き、授業がある教室に向かう
—福井市の至民中



がひと足先に導入しているが、福井市教委の新進正芳指導主事は「教えられるのを待つだけでなく、自ら学びとる姿勢につながる」と利点を強調。また、例え理科の授業なら、どの学年のクラスも同じエリアで授業を受けられることになり、「教室の学びの跡や授業の様子を見ることで、学習に連続

教科センター方式

性も生まれる」（同指導主事）と解説する。
◆授業以外にも縦割り
さらに、先輩後輩のつながりを、授業以外の生活面でも強く意識している。また、同校の大きな特徴だ。同一エリア内のホーム（クラス）では「クラスター（集まり、集団の意味）」と呼ばれる学年縦割りのグループが

くられ、教員であるクラスター主任と、生徒から選ばれたクラスター長を中心に学校生活が繰り広げられる。
自分たちで日々のルールを決め、学校祭の準備や職場体験学習なども一

緒に行つという。これまでの学校ではイメージしにくいのが、同校の研究主任、牧田秀昭教諭は「クラスターは生活基盤を共有する、小さな学校、ただわが新しい中等教育に挑戦したい」と意気込んでいる。

「新時代の学び」始動

先輩後輩つながり重視

さらに同校は、初めて校外からの生徒も受け入れ、初年度は土人が城外から通学する。また福井大教職大学院の拠点校にもなっており、教員のレベルアップの面からも大きな期待が寄せられている。

◆校舎内に教科エリア
新校舎（鉄筋コンクリート二階建て）の正面玄関を入ると、まず「二階会」の文字。ここがそれぞれ吹き抜けの「葉っぱエリア」の開放感に驚かされる。学校らしからぬ開放感のステーションや広いラン

名前の付いたエリアに分
計は、「教科センター方式」に対応するため。各クラスの生徒はホームを拠点としながら、大学のように授業に合わせて教室を移動する。
教科センターは、県内では丸岡南中（坂井市）

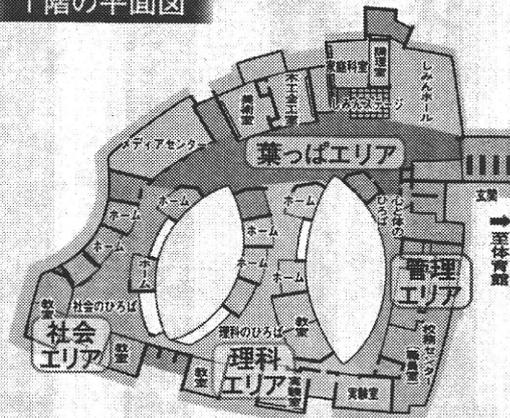
福井市の至民中の新校舎が南江守町に完成し、七日に始業式がある。木の葉をイメージしたという曲線的な建物の外観もさながら、中身はもっとユニークだ。生徒が授業ごとに教室を移動する福井市初の「教科センター」方式、学年縦割りの「クラスター」なる単位で送る学校生活。市教委が中等教育を真直ぐと研究協議会を立ち上げ三年、「新しい時代の中学校」を市民に実感させる取り組みが、いよいよ本格的に動き出す。

かれ、それぞれに「教科のひろば」という空間と、それを取り巻く三十四の授業教室がある。教室と言っても、簡単なガラスの引き戸があるだけで、「ひろば」と一体的な空間だ。ひろばには教材や書籍が配置され、同じエリア内に、クラスごとの拠点「ホーム」も三十四つずつある。

ユニーク設計 至民中（福井）

学年縦割りで学校生活 クラスター制

1階の平面図



たい」と説明する。クラスター制は、昨年度から旧校舎でも試験的に導入しており、下級生には上級生の存在が刺戟になり、上級生も指導のやりがいを感じていたようだと言ふ。

◆住民との交流授業も
注目はほかにも多い。校舎全体の三分の一近くを占める「葉っぱエリア」は、地域住民への開放を念頭に置いたスペース。音楽室や木工金工室もあり、生徒と地域住民との交流授業も想定されている。

（福井新聞 2008.4.20）

芸術で交流の輪

きょうから至民中(算)で学校祭

アカデミー倶楽部

福井市至民中学校区内で書道や写真など制作活動をしている住民や同校OBで作る「至民アカデミー倶楽部」が、五、六の両日に開かれる同校の学校祭に合わせ展示会を開く。地域住民を校内に受け入れて開く展示会に山下忠五郎校長は「子どもたちが地域の人や文化に触れることで、心の豊かさや感性、人情をほぐくむ」と期待を寄せる。

同倶楽部は今回の展示会に合わせ各分野の



測量器や書道などの展示の準備を進める地域住民たち＝福井市至民中学校で

書道や測量器展示

住民らが集まり立ち上げた。絵画や彫刻など計七部門の約六十人が参加。会場は、地域との交流の場として設けられ今春から新校舎となった同校一階の一葉っぱ広場。準備に大忙しの四日、メンバーは「子どもがどんな反応するか」と胸を膨らませていた。このうち社南公民館伝統文化委員会は、大正や昭和などの測量器を五十点余り集めた。尺貫法とメートル法が混在する台ばかりなど

今では、なじみのない品々が並ぶ。同倶楽部の飛山哲増代表は「こうした場所で子どもたちと接点を持ち、互いを知るきっかけとなれば大成功」と話した。

(長谷川寛之)

(日刊県民福井 2008.9.5)